

寄稿 @無縫会

@無縫会は昨年結成された俳句の会です。月一回、句会を開き、随時に吟行も行っています。今回は各会員から昨年中の自信作とその自解を披露していただきました。

棺に添う手に降りやまぬ冬の雨

三日尻一吉

「出棺の日は、寒い冬の日でした。朝からの雨は降り続き止むことはありませんでした。亡き夫に最後のお別れをする義姉の目から流れ落ちる涙は手に落ち、また手に落ち、降り続く雨のように流れてはまた流れ、止むことはありませんでした。(会葬者の目から流れ落ちる涙も止むことはありませんでした)この情景を詠んだ句が掲句です。

福寿草寄り添う姿はつこりと

宮澤恵子

お正月の花を購入しようと花屋に立ち寄った時に、福寿草の鉢植えを見つけました。

厳しい寒さの中で固い蕾の福寿草が寄り添うような姿に温かなやさしい気持ちになりました。

木枯らしに誘われ今宵君と酒

中島泰志

木枯らしが吹く夕暮れ時、人肌に爛をつけたお酒を飲むのは大人の、それも日本人の特権だと密かに確信して居ます。つまみはしめ鯖とおでんあたりでいかがでしょうか？それに気の置けない友人との語り、そんな情景を感じていただければ幸いです。

静かなる賢者の、とし冬木立

佐藤次郎

葉をすっきり落とし、幹と枝だけの簡素な姿ですつくと立つ丈の高い木々。その佇まいはさながら、寒さをものともせず、冬の静謐の中で背筋を伸ばしてひたすら思索にふける哲人の群像のように見えた。初冬の早野を歩いていくうち、ふと想を得た句だ。

寒氷めげずに泳ぐメダカかな

植木昌昭

もともと魚が好きで、水族館オタクでしたが、退職したときにメダカを飼い始め、水草も自生させちよつとした「我が家の水族館」を楽しんでいます。今年は寒さが厳しいなか、同じ水槽にいるドジョウは砂の中で眠っています。が、元気に泳いでいるメダカに愛おしさを感じました。

山眠り沈みし村の湖静か

岩田輝夫

実は丹沢湖には昨年四月に行ったのですが、湖畔の桜の少し残る花と葉桜が静かな湖面に溶け込んでいる景色がとても印象的で、玄倉ダムの前にある記念碑には沈んだ村のことが書かれていました。村の人たちは足柄上郡の中井町に移転したそうです。句に詠むには冬の景色が合うように思いました。



山の端に止め置きたし秋夕日

田中喜美子

我が家は高台にあり二階からは富士を始め箱根、丹沢の連山が一望できる。秋の夕暮れ、その窓に広がる落日の美しさには息を呑むものがあつたが句は出来なかつた。そんな或る日二階へ来て何気なく部屋を開けた。燃え切った真っ赤な夕日が大山の山の端にかかり、みるみる中に黒い山影に落ちて行く所だった。その時生まれた句である。

秋草の咲いて茶席に鎮まれり

井口征男

昨秋、古民家園の古民家で開かれた茶席に参加しました。正式な茶席に加わるのは初体験。庭園に向かって開け放たれた座敷で師匠と思しき和装のご婦人に点てていただいた濃茶の一杯、よくぞ日本に生まれける！でした。また、その床の間に、どこにでも咲く白菊の一輪。「茶のこころ」の片鱗を味わえたひとときです。

飯塚敏洋の読書のすすめ

昨年度のノーベル文学賞作家であるカズオ・イシグロの第4作目に当たる「充たされざる者」(中央公論社1977年刊 上・下)は前3作迄のリアリズムの世界から離れ、カフカの「城」を思わせる不条理な世界を描いています。

世界的なピアニストである主人公がある町の演奏会に呼ばれるが、現地で町民の思わぬ相談事や町の元有力者の振る舞いに翻弄され悪戦苦闘した挙句、演奏する目的が果たせなくなってしまう。真摯な対応が裏目に出る世界を端正かつユーモラスに描いています。

編集後記

一面にあるように新年会が開かれました。三回目ですが、回を重ねるごとに充実していくようです。それはすなわち「あ・そうかい」の発展を示す証。誠に喜ばしい限りであります。今年四年目に入る我々が会に、皆さんの一層のご協力をお願いいたします。